

於竜ノ口山猪鹿追御覧之図

令和3年度企画展 池田家文庫絵図展

岡山藩と武芸



2021 IKEDAKEBUNKO EZUTEN
Okayama Han and Martial arts

岡山大学附属図書館
Okayama University Libraries

岡山シティミュージアム
Okayama City Museum

林原美術館
HAYASHIBARA MUSEUM OF ART

岡山藩と武芸

Okayama Han and Martial arts

令和3年度
企画展

池田家文庫絵図展

- 会 期 令和3年10月30日(土)～11月14日(日)
- 会 場 岡山シティミュージアム 4階 企画展示室
- 主 催 岡山大学附属図書館・岡山シティミュージアム
- 共 催 林原美術館
- 後 援 岡山県教育委員会・岡山市教育委員会

岡山大学附属図書館と岡山シティミュージアムは、共同で企画展池田家文庫絵図展「岡山藩と武芸」を開催します。池田家文庫絵図展は、岡山大学と岡山市の文化事業協定に基づく事業であり、本年度で17回目の開催となります。

本展覧会は、岡山大学附属図書館が所蔵する備前岡山藩池田家に伝えられてきた江戸時代の藩政資料である池田家文庫を、広く地域社会の皆様に公開し、親しんでいただくことを目的に開催されるものです。中でも本展は地図資料である「絵図」を中心に展示していることを特徴としております。

今年のテーマは、現在の武道にもつながる「武芸」です。

武芸とは、武士にとって潜在的な芸能でした。泰平の世となった江戸時代においては、実戦が行われなくなり、武芸修練への必然性が薄れましたが、武士には教養や嗜みとして武芸が求められました。近世中期には、8代将軍徳川吉宗の武芸奨励により、岡山藩でも実地的、実践的な軍事訓練である狩猟や、藩士の技量を披露する武芸上覧がしばしば行われました。そして近世後期以降には、社会にさまざまな変革が求められた中で、各種武芸は発展し、担い手も武士のみならず民間へと裾野が広がっていきました。

そこで本展では池田家文庫の関係資料に、今回のテーマに沿って選んだ林原美術館の収蔵品を加えた58点の資料により、近世岡山藩の武芸の歩みをご紹介します。

この展覧会を通して、多くの方が岡山ひいては日本の歴史に興味や関心を深められ、池田家文庫を大切な地域の共有の財産であると感じていただければ、幸いです。

2021年10月30日

岡山大学附属図書館
館長 甲 賀 研一郎
岡山シティミュージアム
館長 小 西 智 夫

関連行事

Event

開会式＋オープニングトーク

日 時 令和3年10月30日(土) 午前9時50分～午前10時30分
場 所 岡山シティミュージアム 4階 展示室
講 師 岡山大学 学術研究院社会文化科学学域 講師 東野 将伸

講演会「戦国合戦図屏風の世界 ―池田家にかかわる作品を中心に―」

日 時 令和3年11月6日(土) 午後2時～午後4時
講 師 茨城大学 人文社会科学部人間文化学科 教授 高橋 修

凡例

Introductory

- 1 本図録は、岡山大学附属図書館と岡山シティミュージアムが令和3年10月30日(土)～11月14日(日)の会期で開催する「企画展 池田家文庫絵図展『岡山藩と武芸』」の図録である。
- 2 展示番号と本書の図版番号、展示資料目録に記した番号は一致する。また表記は岡山大学附属図書館所蔵の資料は図版番号、資料名、頁数、年代、池田家文庫整理番号、法量(タテ×ヨコ、cm)の順に記した。林原美術館所蔵の資料には林1から始まる番号を付し資料名、頁数、年代、林原美術館所蔵品番号、法量(タカサ×ヨコ×オクユキ、cm)の順に記した。
- 3 本書に掲載した展示資料の写真は、岡山大学附属図書館が所蔵する絵図デジタル画像及び岡山シティミュージアムが撮影した画像である。林1～林5の写真は林原美術館の提供による。
- 4 本書の総説・展示資料解説は、岡山大学学術研究院社会文化科学学域講師 東野将伸が執筆した。林1～林5については林原美術館主任学芸員 橋本龍が執筆した。本書の編集は岡山大学附属図書館と岡山シティミュージアムで行った。

目次

Contents

I	令和3年度 池田家文庫絵図展 「岡山藩と武芸」解説	1
II	出展資料解説	3
III	出展資料目録	20
IV	池田家文庫絵図展・記念講演会開催記録	21

はじめに

江戸時代の武士は軍事を職務の一つとする身分であり、「武」を身に付けることが少なくとも理念的には求められていた。江戸時代前期以降、大規模な戦いが感覚的に遠いものとなって以降も、武芸は身に付けるべき嗜みや学問としての地位を保ち続け、その教授を代々の家業とする者もみられた。そして、8代将軍吉宗による武芸奨励や、18世紀後期以降の社会状況・対外関係の変化に対応して、新たな武芸の潮流がみられるようになった。それとともに、「武」の担い手も農民や町人といった幅広い階層へと広がっていった。

過去の池田家文庫絵図展では、平成18年（2006）度に「戦さと城」をテーマとした展示を行い、同25年度（「開国と岡山藩」）、同26年度（「岡山藩と明治維新」）には幕末期の軍事、同21年度（「岡山藩の教育」）には武芸を含む教育をテーマとしていた。今年度はより幅広い時期と対象を通じて、岡山藩における武芸・軍事の内容とこれに関わる人々の活動をみていく。

(1) 岡山藩の狩猟

江戸時代の武士が行う狩猟は娯楽であるとともに、武芸の鍛錬や軍事演習としての意味合いも含まれていた。特に、藩主が行う大規模な狩猟は、その準備、実施、終了後の成果の確認までを通じて、模擬的な軍事行動といえるものであった。また、藩主の狩猟の際には領民が見物のために集まっており、猟場までの行軍も含めて藩主の威光を示すとともに、領民にとっての娯楽の一つとしても機能していたことがうかがえる。

岡山藩においては、備前国磐梨郡高倉山、同国津高郡藤ヶ鳴山、同国上道郡龍ノ口山など、複数の猟場が設定されており、藩主はたびたび狩猟を行っていた。特に初代藩主光政は、自身の楽しみに加えて、家臣の武芸・軍事稽古や子息への教育を目的として、藩主在任時・隠居後の双方において大規模な狩猟を行っていたとされている。また、狩猟を許された領域を有していることは、武士にとって実利と名誉の双方に関わる事柄であった。これは藩主・家臣の双方において同様な状況があったとみられ、展示では岡山藩家老の片桐池田家が、藩より岡山城下近辺での鷹狩りを許可された際の文書を取り上げている。

藩だけでなく、将軍も大規模な狩猟をたびたび実施していた。特に、下総国小金原には幕府の牧がおかれ、狩猟の舞台とされていた。池田家文庫には8代将軍吉宗の小金原狩猟についての絵図が複数残存しており、諸藩が吉宗の動向に注目していたことがうかがえる。

(2) 軍学・武具

江戸時代の初期・前期には、実戦で顕著な働きをみせた者をはじめとして、武芸者を家中に迎え入れることがたびたびみられた。初代藩主池田光政に武芸を指南した上泉治部左衛門に始まる上泉家、日置当流（日置流印西派）弓術を継承した吉田家、甲州流軍学を継承した松田家など、岡山藩においても武芸指南を代々の家職とする家が複数みられる。

藩士の軍備や武具については、詳細な規定が定められていた。例えば、武具や旗指物についての規定が出されており、各藩士の旗指物や装束などを彩色で描いた冊子も複数残存している。これらの規定は17世紀を通じて枠組みが形成されていったとみられ、例えば天和2年（1682）5月に初代藩主光政が死去し、これ以降2代藩主綱政による治政が本格化するが、天和4年正月11日には「軍役之定」、「旗本家中武具之定」、「留守中若一揆等俄二起候時守城之定」といった軍事や藩士の軍備にかかわる「定」が複数出されている。文化面での活動が注目されてきた綱政の別の側面を見いだすことができるとともに、軍備や防衛が17世紀後期においてもある程度意識すべき政策課題であったことがわかる。

軍学に関わる事柄として、池田家文庫には過去の合戦を描いた絵図が多く残存しており、今年度は「濃州関ヶ原御合戦図」を展示している。ここでは、関ヶ原の戦いとそれに先だって行われた戦い、特に池田輝政らによって行われた岐阜城攻めなどについての情報が詳細に描かれている。本資料自体は享保14年（1729）の作成であるが、池田家祖先の戦功を示すものとして、8代将軍吉宗に

よる全国的な武芸奨励の動きと関連して作成されたものであろう。この他、戦陣の様子や布陣を描いた絵図も複数みられることから、軍事面での情報が記録・継承されていたことがわかる。

(3) 武芸と藩主御覧

岡山藩主は、剣、槍、鉄砲、軍学など、多様な武芸を学んでいた。それぞれの武芸に指南役がおり、藩主や世嗣といえども形式上は弟子として、起請文などを作成して武芸の教授を受けていた。武芸の修練を経た後には免状や秘伝書が渡され、その武芸を修めたこととなった。一方、藩士も藩学校などにおいて、藩主と同様に多様な武芸を学んでいた。藩学校では世話役・指南役が武芸を教授していたが、一つの武芸につき一つの流派というわけではなく、複数の流派の教授がなされており、必ずしも藩内で流派が一本化されていたわけでない。池田家文庫には、藩主の免状や師事の際の誓詞類、稽古への出席帳など、剣術、弓術、槍術、砲術、手裏剣術、馬術、兵学・軍学といった武芸各流派に関わる資料が多く残存している。弓術の日置当流（日置流印西派）、槍術の新陰正田流、砲術の藤岡流、軍学の甲州流、馬術の大坪流、居合術の田宮流などに関する資料が目立つものの、実に多彩な武芸が岡山藩において学ばれていたことがわかる。

このような武芸鍛錬の成果は、後楽園の射場や馬場などにおいて、藩主御覧の中でたびたび披露されていた。藩主などが観射亭や観騎亭から射術や馬術を観覧しており、このことに関する絵図や文書も多く残されている。これらの武芸に出精し、相応の技能を身に付けた者や弟子への指導に尽力した者へは、藩主から褒賞が与えられていた。武芸の奨励や出精者への褒賞は、武芸や軍事の必要性が強く認識されていく幕末期にかけて、より顕著にみられるようになっている。

(4) 幕末の武芸と軍事

19世紀前中期には、外国船の来航などによって軍備の必要性が実感されるようになり、西洋式の軍制や武器の整備が進められた。この時期の武芸・軍学として著名なものには、西洋流砲術の高島流などがあり、同流は幕府や各藩で採用されていく。このように、幕末期には従来の武術・軍学とは異なる武芸が社会に広まっていき、民間での剣術の流行もみられるようになる。以上のような状況を背景として、領主は武士だけでなく農民や町人にもある程度軍役を担わせるようになり、「農兵」等と総称される新たな部隊が編成されていった。

岡山藩においても、幕末期には様々な側面からの軍制改革がなされ、軍事動員の際の規定類が複数出されている。そして、岡山藩兵は房総半島や大坂表の防備を任せられ、実際に出兵が行われる事態となっている。特に最幕末期の慶応期（1865～1868）には、第二次長州戦争や戊辰戦争などによる軍事的な緊張が高まったとみられ、岡山城下と藩領の防衛体制を検討したとみられる絵図・文書類が複数残されている。同時期に岡山藩は新政府の命令に従い、備中松山・姫路などの鎮撫への出兵や、箱館にまで至る戊辰戦争へも従軍し、合計で55名の戦死者が出ている。その後、明治期の日本においては徴兵制度が採用され、軍事や兵役は社会のより広範な人々に関係する事象となっていく。

江戸時代の武術・軍学は、幕末維新期の洋式軍備への転換や明治期における再編成を経つつ、近代日本のそれへと一部はつながっていったとみられる。他方では、武芸がスポーツとしての性格を強め、心身の鍛錬という目的を持ちつつも競技として広まっていく。現在では日本のみにとどまらず、多様な「武道」として各国の多くの人々に親しまれている。

岡山大学学術研究院社会文化科学学域 講師 東野将伸

〔参考文献〕

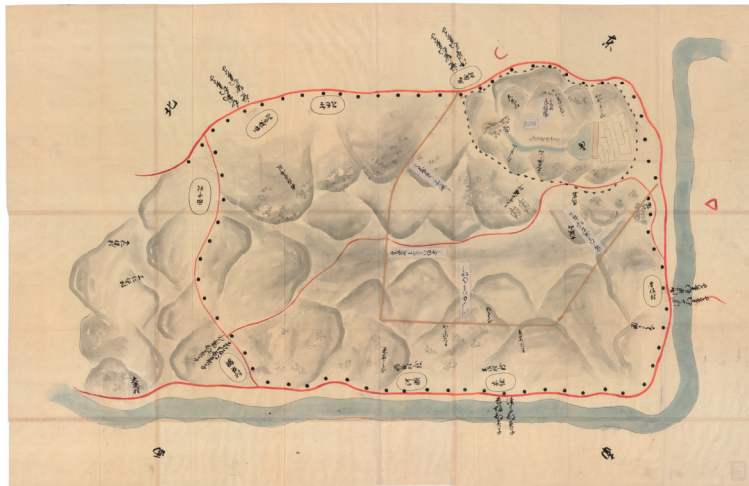
- 魚住孝至『日本の伝統文化6 武道』（山川出版社、2021年）
ひろたまさき・倉地克直編『岡山県の教育史』（思文閣出版、1988年）
倉地克直「池田光政と狩猟」（『林原美術館紀要・年報』5、2010年）
倉地克直『池田綱政 元禄時代を生きた岡山藩主』（吉川弘文館、2019年）
谷口澄夫『岡山藩政史の研究』（塙書房、1964年）
福田千鶴・武井弘一編『鷹狩の日本史』（勉誠出版、2021年）
守田勝彦編著『備前岡山藩の弓術 吉田家御奉公之品書上より』（吉備人出版、1998年）
横山輝樹『徳川吉宗の武芸奨励 近世中期の旗本強化策』（思文閣出版、2017年）
岡山県史編纂委員会編『岡山県史 第六巻 近世Ⅰ』、『同 第七巻 近世Ⅱ』、『同 第八巻 近世Ⅲ』、『同 第九巻 近世Ⅳ』、『同 第十巻 近代Ⅰ』（岡山県、1984～1989年）
岡山県歴史人物事典編纂委員会編『岡山県歴史人物事典』（山陽新聞社、1994年）
国史大辞典編纂委員会編『国史大辞典』全15巻（吉川弘文館、1979年～1997年）

【岡山藩の狩猟】

1 〔磐梨郡牟佐村高倉山御鹿狩絵図〕

1 枚 子年（享保5年〈1720〉ないし同17年〈1732〉）
T13-30-2 65.7 × 101.4

備前国磐梨郡牟佐村の高倉山（現在の赤磐市）で行われた狩猟の様子を描いた絵図である。御野郡、津高郡、磐梨郡、赤坂郡、和気郡から貢子が動員されていることがわかる。本図では貢子の配置と地形・地名についての情報が主となっている。作成年代の詳細は不明だが、展示資料2・3から、享保期の様子を描いたものとみられる。



2 〔磐梨郡牟佐村高倉山御鹿狩絵図〕

1 枚 子年（享保5年〈1720〉ないし同17年〈1732〉）
T13-30-3 29.7 × 39.7

展示資料1と一括して保管されていた絵図であり、より拡大した構図で高倉山が描かれている。記された家臣の名前から享保期の絵図と推測され、展示資料1・3と同時期のものとみられる。本図では家臣の配置や獲物の追込みルートについての情報が主となっている。



3 牟佐御待場之図并高倉山東谷御待場之図

1 枚 享保■(7)年(1722)2月18日
H5-18 79.4 × 41.8

展示資料1・2と同様に高倉山を描いたものであり、本図では藩主が待機したとみられる「待場」の配置が描かれている。記されている人名から、享保期の作成であると推測される。



4 藤ヶ鳴御狩場絵図

1枚 明和5年(1768)2月18日
H5-69-2 40.1 × 59.6

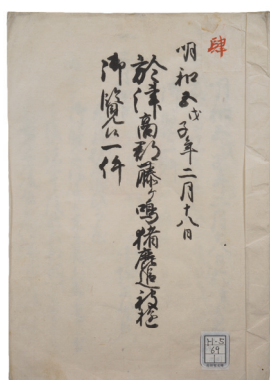
備前国津高郡藤ヶ鳴山(現在の岡山市北区菅野)での狩猟の様子を描いた絵図である。上道、御野、磐梨、津高、赤坂の各郡から出された貢子の分担箇所が色分けされて示されており、各所に配置される家臣の名前も記されている。



5 於津高郡藤ヶ鳴猪鹿追被遊御覧候一件

竪1冊 明和5年(1768)2月18日
H5-69-1 28.2 × 20.0

藤ヶ鳴山で実施された狩猟(展示資料4)の準備・実施の過程で出された文書や狩猟の結果をまとめた帳簿である。展示箇所では、藩主が御覧になる場所付近への見物人の立ち入りを禁じる旨が書かれている。藩主による狩猟がある程度一般に公開されており、多くの見物人が集まるものであったことがわかる。



6 於竜ノ口山猪鹿追御覧之図

1枚 天保15年(弘化元、1844)2月
T13-41 79.0 × 111.0



天保15年に備前国上道郡竜ノ口山(現在の岡山市中区)で実施された狩猟について、家臣の配置や岡山城下町東端の森下口からの移動経路が記されている。山間の様子や周辺の村・神社などの情報も書き込まれており、猟場周辺の詳細な状況を把握したうえで狩猟が実施されていた。この時の貢子の惣人数は4000人であり、狩猟の規模の大きさがわかる。

7 龍口山御狩留 全

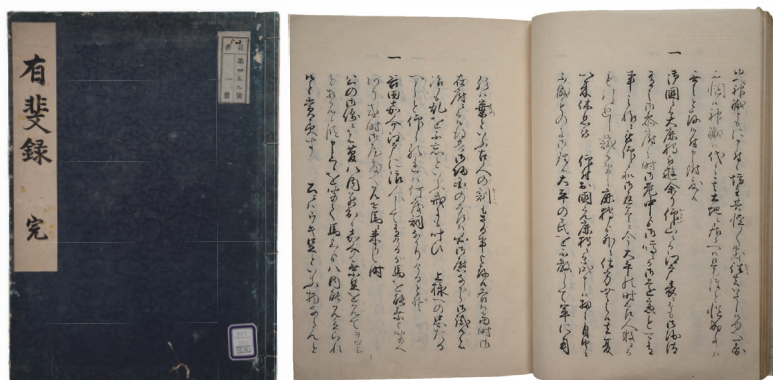
縦1冊 天保15年(弘化元、1844)
H5-1 26.8 × 19.0

竜ノ口山で実施された狩猟(展示資料6)の準備・実施の過程で出された文書や狩猟の結果をまとめた帳簿である。展示箇所では、上道郡全域や山裾の村々からの貢子の差出と篝火・雪隠の準備などについて確認しており、狩猟の実施にあたって綿密な調整や準備がなされていたことがわかる。



8 有斐録

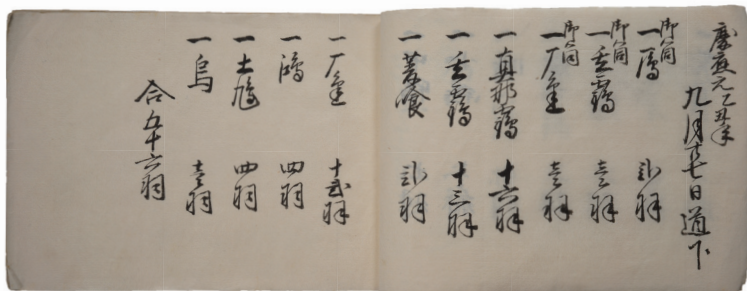
縦1冊 寛延元年～2年(1748～1749)頃
P21-269 27.2 × 19.6



岡山藩士三村永忠が初代藩主池田光政に関する事蹟・言行を後年に編修した著書。光政の言行を称揚する傾向があり、内容に対しては資料批判が必要である。展示箇所は寛文9年(1669)2月2日の半田山での狩猟を幕閣にとがめられた光政が反論している箇所である。幕閣に対する光政の立場や意見がうかがえる記述だが、実際の事象であったのかは不明である。

9 御殺生御獲物帳

横半1冊 文久3年(1863)11月～慶応元年(1865)9月27日
H5-4 13.5 × 19.8

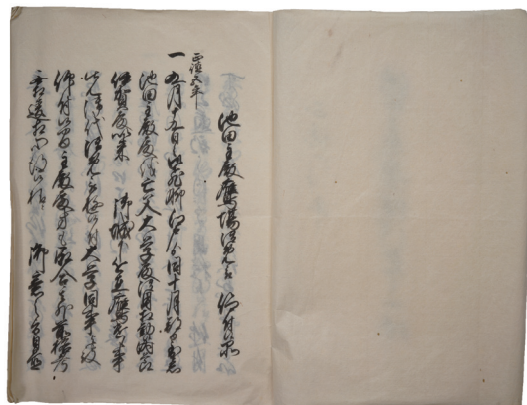


岡山藩領において狩猟が行われた日時、場所、獲物の種類と数量などが記された帳簿である。展示箇所は慶応元年(1865)9月27日に行われた狩猟についての記述であり、「御筒」(鉄砲)を用いて雁、玄鶴、雁金、真那鶴、玄鶴、菱喰、雁金、鴻、土鳩、鳥が合計56羽捕らえられている。この時期の鳥猟では、雁や鶴が主な対象であったことがわかる。

10 池田主殿鷹場御免之一件

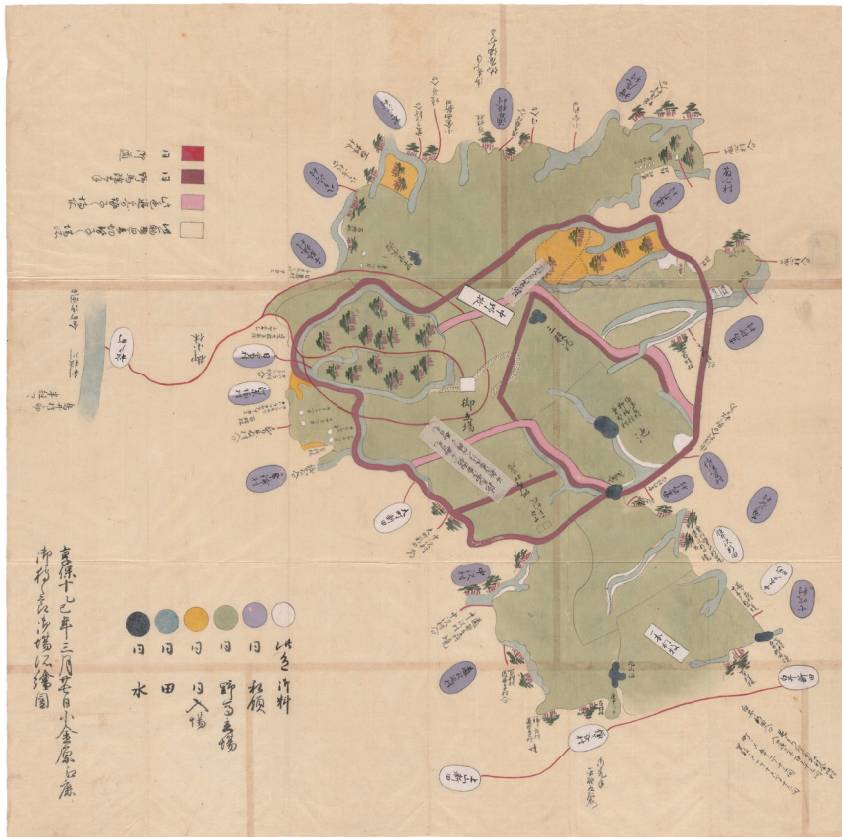
縦1冊 正徳6年(享保元、1716)
H5-3 28.0 × 20.3

鷹場(鷹狩が許された場所)の認可は、武士にとって実利と名誉の双方において重要な事柄であった。展示資料は、池田主殿(長喬、片桐池田家第4代当主、岡山藩家老)が岡山城下近辺で鷹狩を行うことを、父の池田大学(長久)と同様に許可する旨が江戸(藩主池田継政)より仰せ渡されたことを記したものである。



11 小金原江鹿御狩之節御場所絵図

1枚 享保10年(1725)3月27日
T13-38-1 59.2 × 59.9



下総国小金原（現在の千葉県松戸市）において、8代將軍吉宗が実施した巻狩りの配置を描いた絵図である。吉宗は武芸奨励の一環として、5代將軍綱吉以来中断していた巻狩りを再開した。この巻狩りは480ヶ村から1万5000人余が動員された大規模なものであり、本絵図では吉宗の座所である「御立場」の他、周辺村々から小金原への「入口」の配置などが詳細に描かれている。

12 〔下総国小金原江御鹿狩騎馬立絵図〕

1枚 享保10年(1725)3月27日
T13-38-2 29.3 × 40.1

下総国小金原（現在の千葉県松戸市）での巻狩りの際の「御立場」（絵図中の白四角）周辺での人員配置を描いた絵図である。この巻狩りでは、周辺村々からの貢子だけでなく、幕府の書院番と小姓組などからも数百名の騎馬勢子（貢子）が出されている。

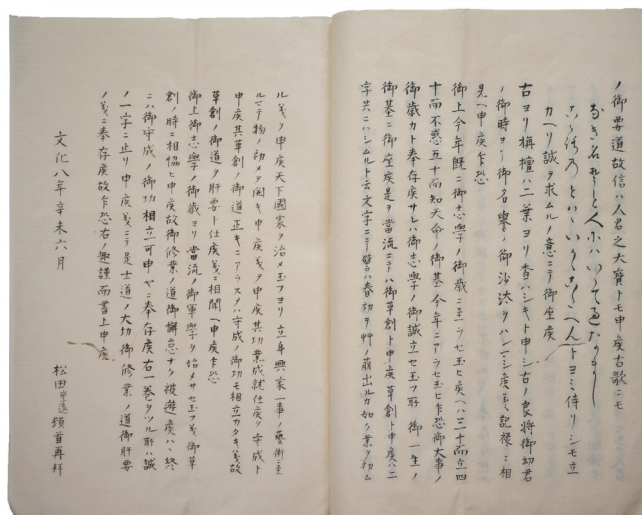


【軍学・武具】

13 〔松田重遠軍学進講書〕

竪1冊 文化8年(1811)6月
H2-336 28.2 × 20.4

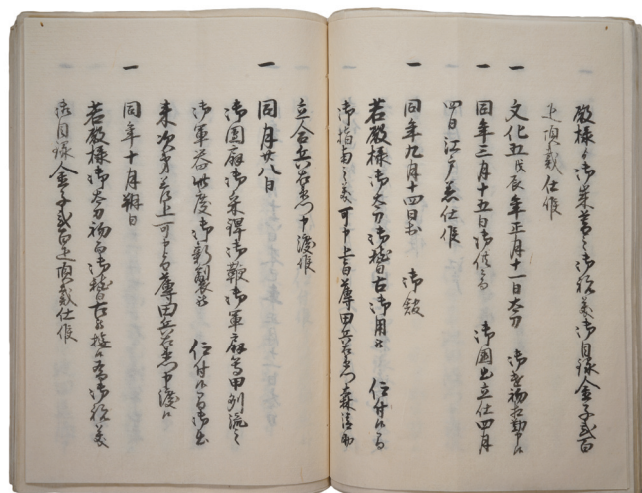
松田家は岡山藩の甲州流軍学師範を代々務めた家である。本資料は松田與右衛門重遠が、池田斉輝(1797～1819、6代藩主斉政世嗣)への軍学教授にあたって、武将としてのあるべき姿や軍学を学ぶにあたっての心構えを説いたものである。



14 〔松田金次郎奉公書〕

竪1冊 寛延2年(1749)12月晦日～明治2年(1869)12月晦日
D3-2429 28.4 × 20.4

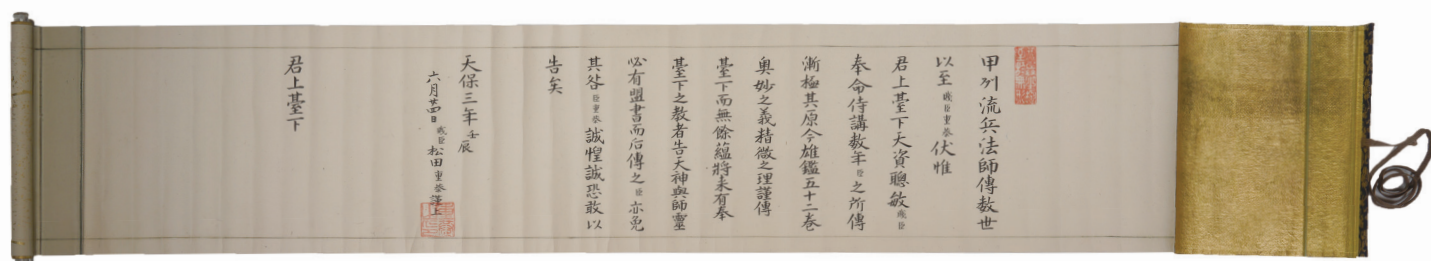
織豊期の当主松田与右衛門からの同家の事績が書き継がれており、明治2年に松田金次郎(重直)から岡山藩へ提出されたものである。展示箇所では、文化5年(1808)に松田與右衛門重遠が「若殿様」への太刀稽古にあたったことなどが記されている。



15 許容牒

1巻 天保3年(1832)6月24日
H2-286 18.4 × 108.6

松田重恭が岡山藩7代藩主斉敏に対して、甲州流兵学の『雄鑑』(北条氏長著『兵法雄鑑』カ)の内容を全て伝授したことを証する文書である。形式的な文言とみられるが、以降斉敏が兵学を他者に伝授する際には、天神と師霊への起請が必要であることも記されている。



16 旗本家中武具之定

豎1冊 天和4年(貞享元、1684)正月11日
H1-8 23.2 × 17.5

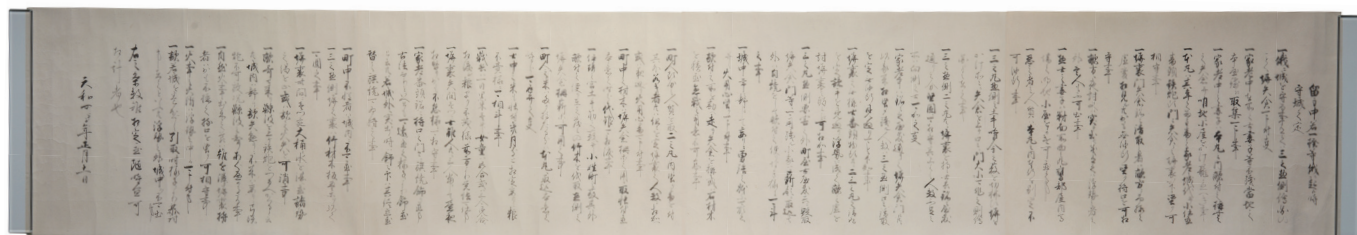
岡山藩の役職ごとの陣羽織や旗・幟が彩色で描かれている資料であり、展示箇所では御医者等の羽織、大組組頭の旗、御鉄炮引廻しの幟が描かれている。本資料は天和4年正月11日の日付が書かれており、この時には岡山藩2代藩主綱政より軍事面での命令が複数出されている。本資料も綱政の動向と関連して藩士の軍装が調査された際のものとみられる。



17 留守中若一揆等俄二起候時守城之定

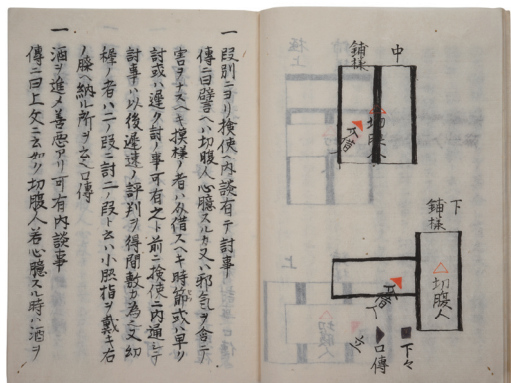
1巻 天和4年(貞享元、1684)正月11日
H2-111 30.6 × 177.2

天和4年正月11日には、池田綱政によって軍事についての命令が複数出されており、本資料もこのうちの1つとみられる。藩主留守中の岡山城・城下町への軍事侵攻に対する備えの方法が詳細に記されている。



18 切腹介錯法令口決 全

豎1冊 文化7年(1810)4月
D7-38-1 23.3 × 17.4

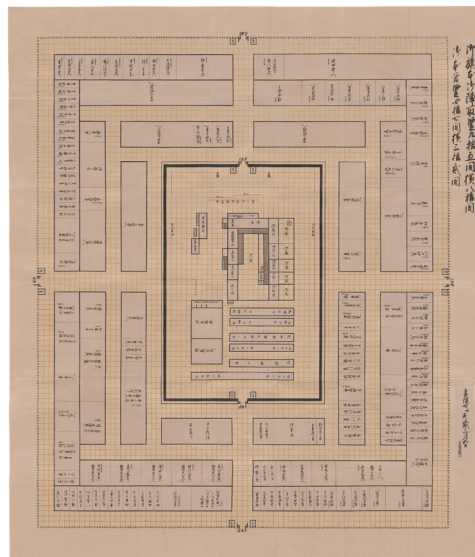


「須田流」の記述があり、切腹の際の作法や切腹人の格に応じた扱いなどが詳細に記されている。切腹人が座る畳の数やその配置によって、極上・上・中・下の作法があり、展示箇所右頁の図は中・下の作法の際の図である。本資料の末尾には平尾新兵衛長春(国学者・歌人の平賀元義の父)の名前が記されており、岡山藩主へ差し出されたものとみられる。

19 〔御旗本御陣取図〕

1鋪 享保7年(1722)3月5日
H2-100-3 206.6 × 175.2

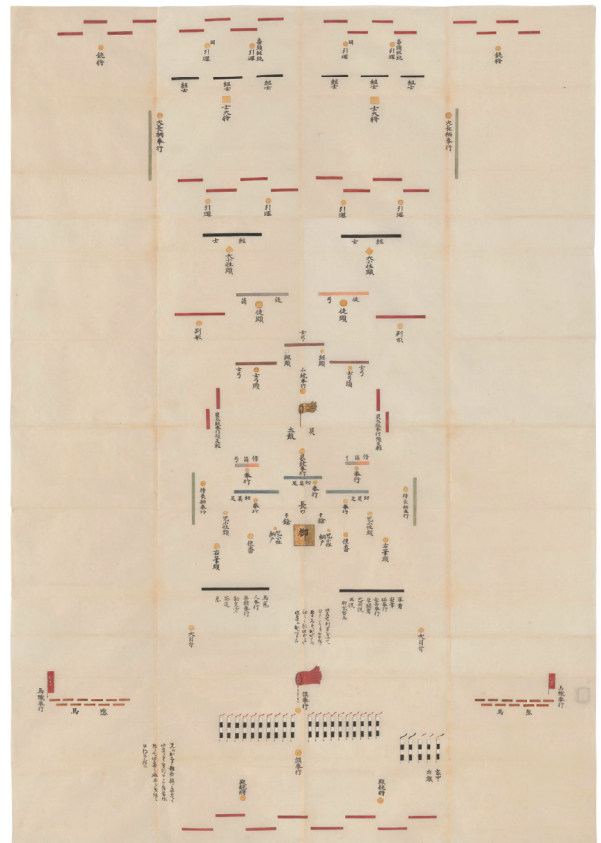
「御陣取之図」と書かれた袋に入れられていた資料の1つである。戦陣において中央の藩主「本営」を中心として、家臣の旗本の配置を描いた図とみられる。幕・旗の配置や本営内の蔵や居住空間など、戦陣の様子が描かれている。



20 御旗本戦前御人数配絵図

1 枚 年月日未詳
H3-161 151.4 × 105.0

藩主「(御)」を中心とした旗本の戦前の配置図が描かれている。銃・騎馬・弓など武装によって色分けされており、大目付や馬幟奉行などの役職も含めて、左右対称に配置されている。医者、茶道、忍など、戦闘を主な役目としない者たちも複数従軍することが想定されていた。



21 〔旗指物図〕

1 帖 年月日未詳
H4-36 25.6 × 21.4

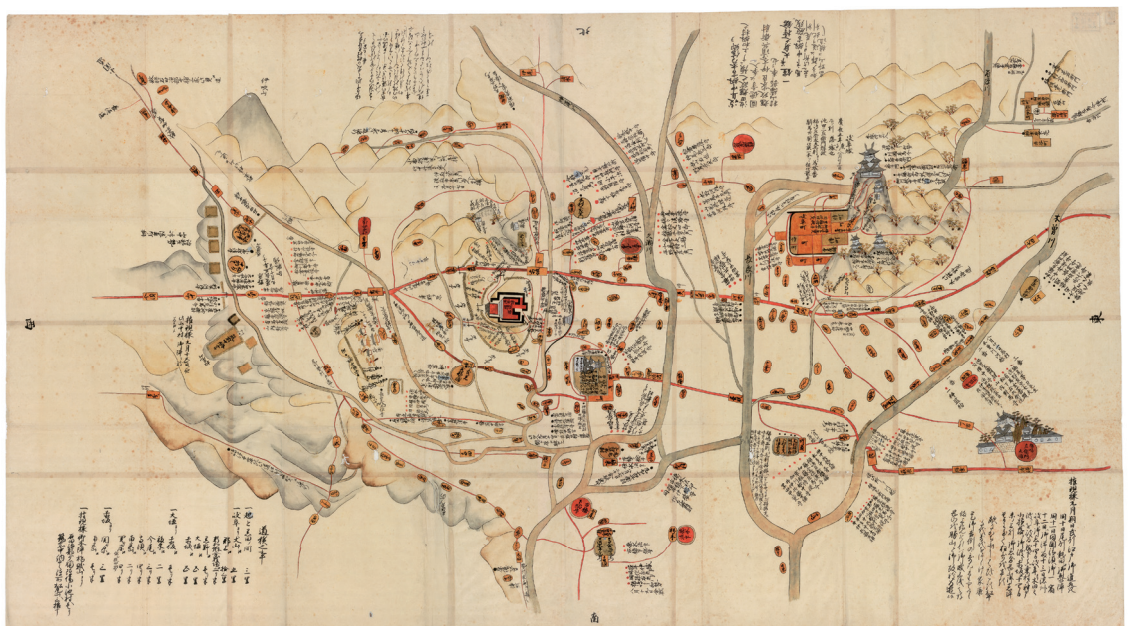
岡山藩士の旗指物が描かれており、家老を先頭とした記載となっている。伊木勘解由、池田主水、池田大学などの名前から、17世紀後半時点での旗指物を描いた図であることがわかる。色彩・形状・模様など、個性豊かな旗指物が掲載されている。



22 濃州関ヶ原御合戦図

1 枚 享保14年(1729)5月
T12-120 111.8 × 202.4

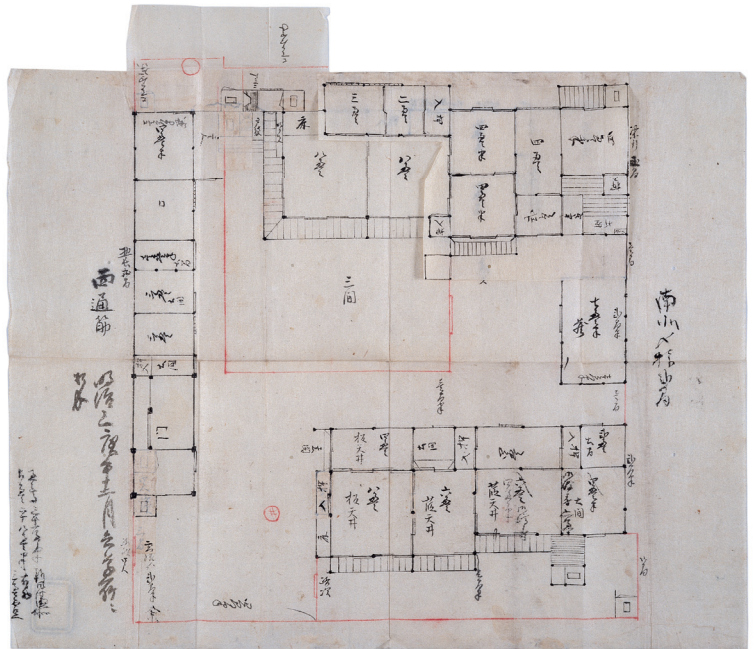
慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いにおける東軍・西軍の布陣や各大名の動向が描かれている。特定の時期の状況ではなく、両軍の進軍や関ヶ原での衝突以前の城攻めについての記述など、一連の戦についての情報が書き込まれている。清洲城・大垣城・岐阜城が絵画的に描かれており、特に池田輝政が活躍した岐阜城攻めについての情報は詳細である。



23 〔兵学所建物用地図〕

1 枚 (明治3年〈1870〉カ)
T4-1-2 28.3 × 36.3

詳細は不明だが、「兵学所」という語句から、明治元年（1868）8月に門田村の台崇寺に設置された兵学館に関する建物を描いた図とみられる。兵学館では築城法や炮術などが教授され、英仏の語学を学ぶことができたとされている。



24 〔岡山城内鉄砲薬蔵所絵図〕

1 枚 (辰年 (明治元年〈1868〉カ))
T3-347-2 54.4 × 58.5

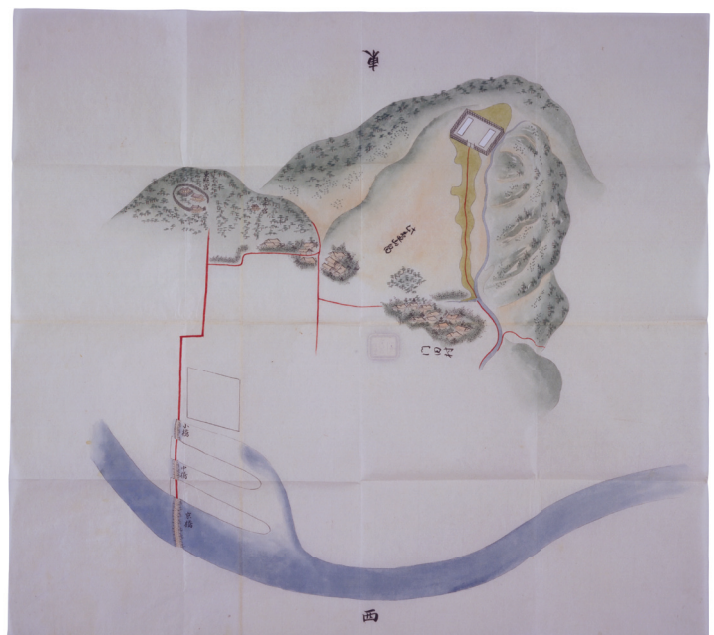
岡山城内の御鉄砲薬蔵の場所が青色の四角で示されており、堀・石垣・矢倉などの防御施設の配置も記された絵図である。作成時期は不明だが、辰年12月13日の日付がある包紙に一括されており、包紙に記された人名も考慮すると、おそらく明治元年（辰年、1868）に軍事動員への対応を念頭において作成されたものではないかとみられる。



25 〔門田村蔵所絵図〕

1 枚 (辰年 (明治元年〈1868〉カ))
T3-347-3 53.5 × 59.2

門田村の蔵所を描いた図である。何の用途の蔵かは判然としないが、展示資料24と一括されていた絵図であるため、幕末期の軍事体制と関連するものであったとみられる。



26 胡籙図

1枚 元禄12年(1699)8月
T13-99-5 40.6 × 54.6

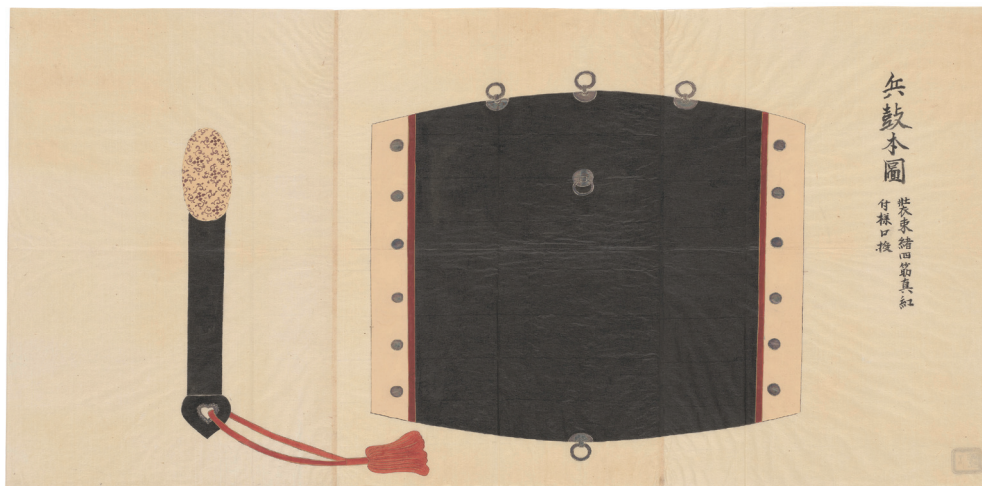
胡籙(やなぐい)は矢を入れて背中に背負う(もしくは腰に付ける)武具である。本絵図と一連のものとなる矢や弓の図が池田家文庫に現存している。代々岡山藩の藩絵師を務めた岡山狩野派の3代狩野三徳の作である。



27 兵鼓本図

1枚 年月日未詳
H2-234-2 40.4 × 83.5

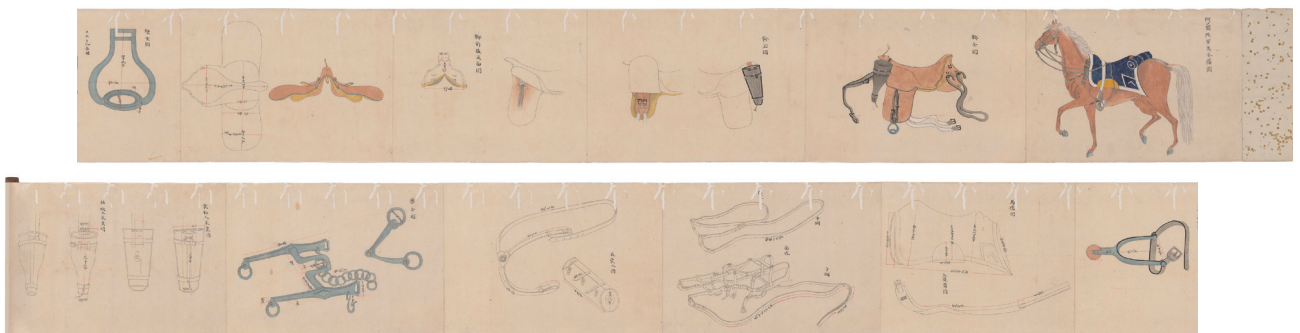
兵鼓(へいこ)は、戦や訓練の際に用いる太鼓である。本絵図と一連のものとなる兵鼓掛と挟台の図が池田家文庫に現存している。作者は不明である。



28 阿蘭陀軍馬全備図

1巻 年月日未詳
T13-102 26.2 × 436.0

詳細は不明だが、おそらく享保期か幕末期に西洋由来の馬と馬具(鞍、鎧、轡など)を描いたものであるとみられる。全体として写実的な筆致が特徴であり、馬体や馬具の構造が鮮明に描かれている。

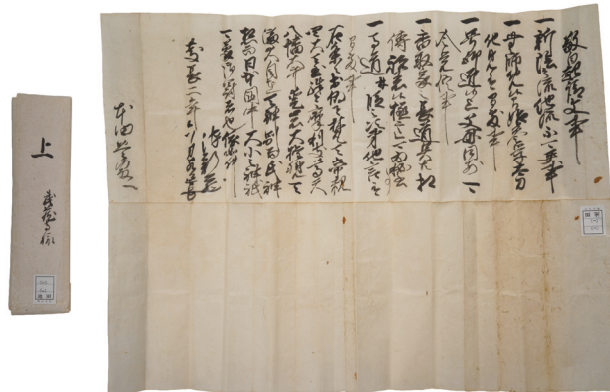


【武芸と藩主御覧】

29 敬白起請文事

1通 慶長2年(1597)6月29日
C9-6-1 34.0 × 47.0

池田利隆(天正12～元和2(1584～1616)、岡山藩初代藩主池田光政の父)が武芸指南役の本田豊内に師事する際に出された起請文である。本田は武術や馬術を教授したものとみられる。当時利隆は14歳であり、父の輝政は三河国吉田城主の地位にあった。



30 敬白起請文之事

1通 寛永7年(1630)11月25日
C9-6-2 35.0 × 55.8

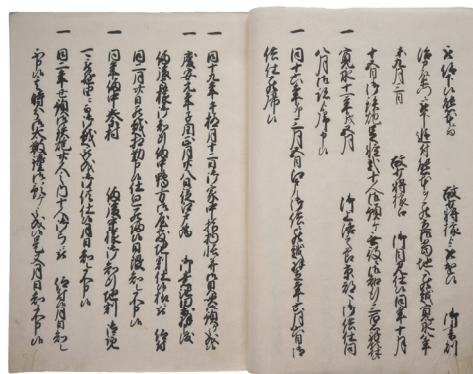
池田光政が武芸指南役の上泉治部左衛門に師事する際に出された起請文である。上泉は兵学・軍学を教授したものとみられる。当時光政は鳥取藩主であった。資料の奥には岡山藩2代藩主綱政の署名もみられるが、同年には綱政は生まれておらず、光政が記した本資料を綱政が後に転用したとみられる。



31 〔上泉兵二郎奉公書〕

豎1冊 元禄9年(1696)～明治3年(1870)12月29日
D3-762 28.0 × 20.5

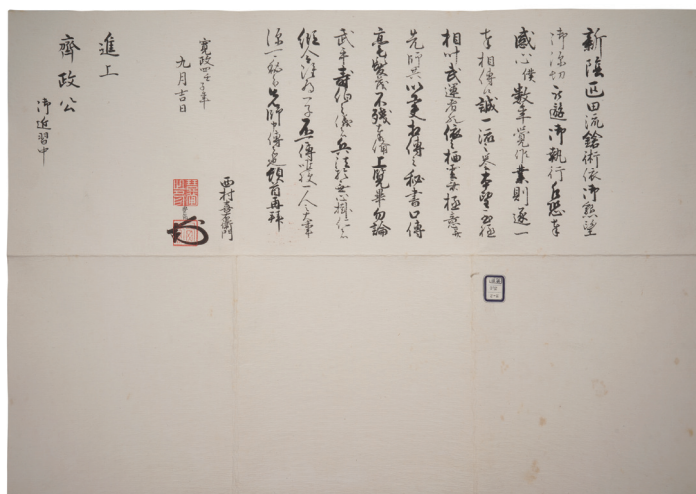
岡山藩士の上泉家において、明治3年の当主兵二郎までの履歴が書き継がれ、藩に提出された帳簿である。上泉治部左衛門(展示資料30)について、大坂の陣に幕府方として従軍したこと、陣の後には上杉景勝や浅野長晟からの仕官の誘いを断り、熊本藩主加藤忠広に仕えていたが、その後池田光政からの要請に応じて仕官したことが記されている。



32 〔新陰匹田流御鎗術御免状〕

1通 寛政4年(1792)9月
H2-240 44.8 × 64.2

岡山藩士の西村喜右衛門から岡山藩6代藩主齊政へ出された新陰匹田流鎗術の免状である。同流開祖以来の極意を伝えたこと、たとえ一子であっても兵法への心がけの無い者には伝授してはならない旨などが述べられている。



33 小筒伝書（一二、三四五、六七、八）

縦4冊 安政6年（1859）2月
H2-305-1～4 24.0×18.2



藤岡六左衛門長悦に始まる藤岡流の由来や鉄砲術を記録した書籍。藤岡家は岡山藩士であり、歴代の当主は鉄砲頭などを務めている。本資料は、藤岡流の系譜を引き継いだ岡山藩士の安藤八太郎直道から「旁室公侍前」（8代藩主池田慶政カ）に対して出されている。展示箇所では、池田輝政の御前で藤岡長悦が鉄砲術を披露した際の様子などが記されている。

34 学校御絵図

1枚（江戸時代後期）
T11-21 184.4×134.6

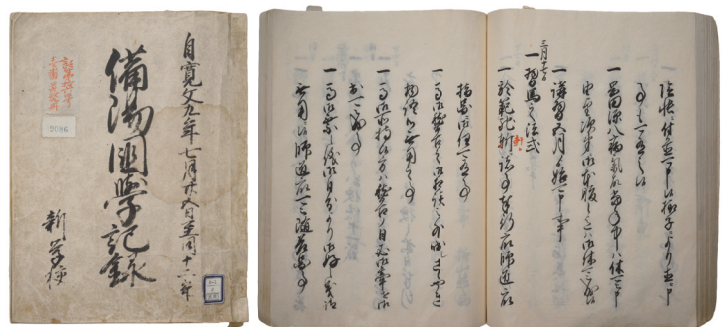
江戸時代後期の岡山藩学校（現在の岡山市北区蕃山町に位置した）の様子を彩色で描いた絵図。北部の敷地は削減された状態である。それでも東西61間半・南北83間半の広さがあった。門から洋池周辺は松林、学房には名称の由来となった草木も描かれており、武芸に関する施設として、射舎や馬場を囲う柵（「調馬埒」）が描かれている。



35 備陽国学記録

縦1冊 寛文9年（1669）7月～同12年（1672）
R1-2 26.5×20.8

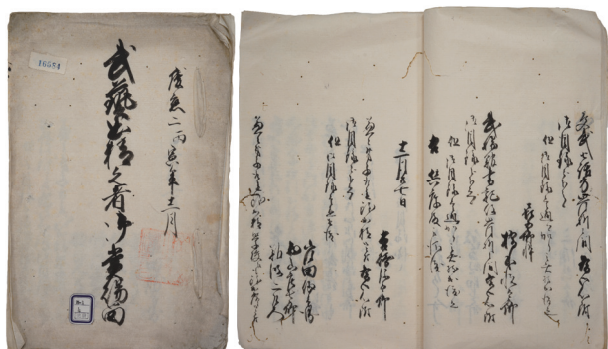
藩学校や閑谷学校など学校奉行のもとでの岡山藩の教育活動を記録した帳簿であり、寛文6年（1666）から幕末維新期まで継続して残存している。展示箇所では「習馬之法式」として、藩学校馬場での馬術訓練の方法や心構えが書かれている。この他、一連の同資料をみると、様々な流派の武芸が藩学校で教授されていたことがわかる。



36 武芸出精之者御賞賜留

縦1冊 慶応2年（1866）12月
H1-4 29.0×19.5

武芸やその指導に出精した家臣を賞した際の文書の写しが記された帳簿である。武揚館での書記役の勤務や弟子の取立への褒賞として、心付けの目録が下されている。武揚館は岡山藩学校の中の一区画の施設であり、おそらく幕末期に設置され、藩士の武芸訓練を行っていたとみられる。



37 〔後樂園絵図〕

1 枚 明治8年(1875)2月
T6-1-1 81.4 × 116.5

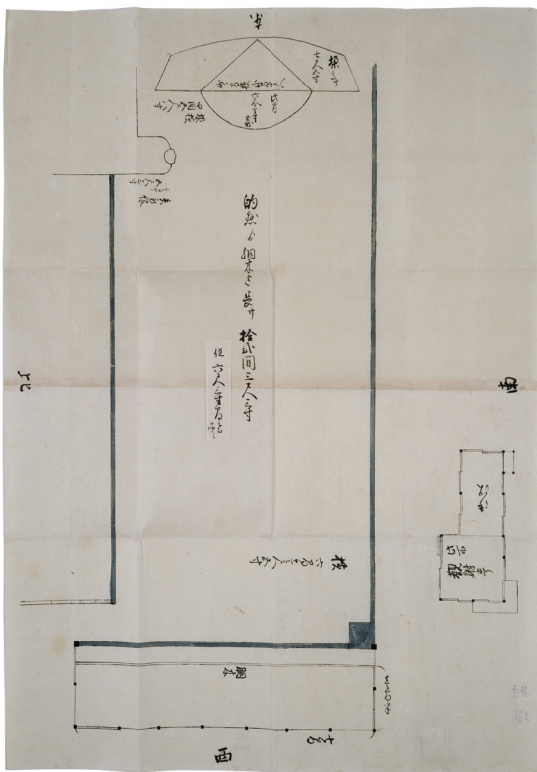
明治8年時点の後樂園の様子を、西側の視点から描いた絵図である。絵図の左下には射場と観射亭、絵図左の中央には観騎亭がみられ、藩主御覧の中で武芸や馬術の披露がたびたび行われていた。



38 〔御後園射場絵図〕

1 枚 年月日未詳
T7-152-4 53.7 × 38.2

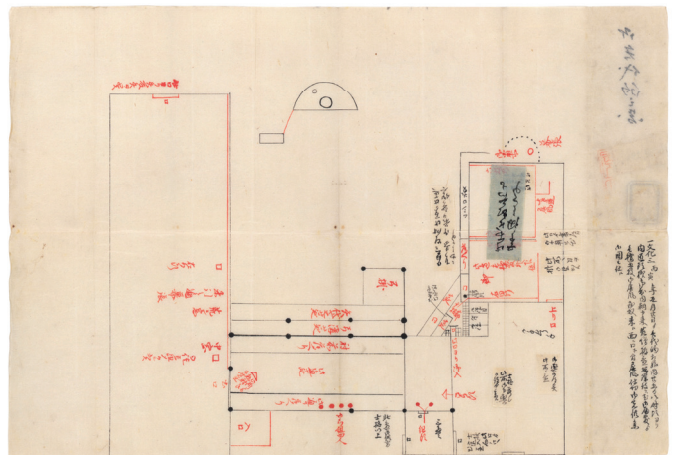
御後園の射場の図であり、「的懸より胴木迄長サ拾貳間三尺三寸」「横六間壺尺五寸」とある。射場では家中の者による弓の稽古などが行われ、観射亭から藩主などが観覧した。



39 御矢代的之図

1 枚 文化3年(1806)9月
T11-120 27.7 × 40.3

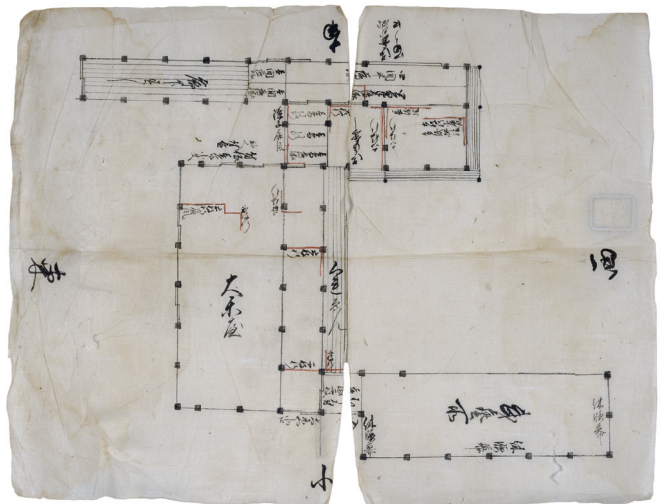
後樂園の射場にて、「内匠頭」(鴨方藩6代藩主池田政養カ)による射術御覧が行われた際の絵図とみられる。供の者が待機する場所や、各所での幕張や毛氈の配置などが記されている。



40 〔御後園武芸所・大楽屋図〕

1 枚 年月日未詳
T7-152-2 29.2 × 37.1

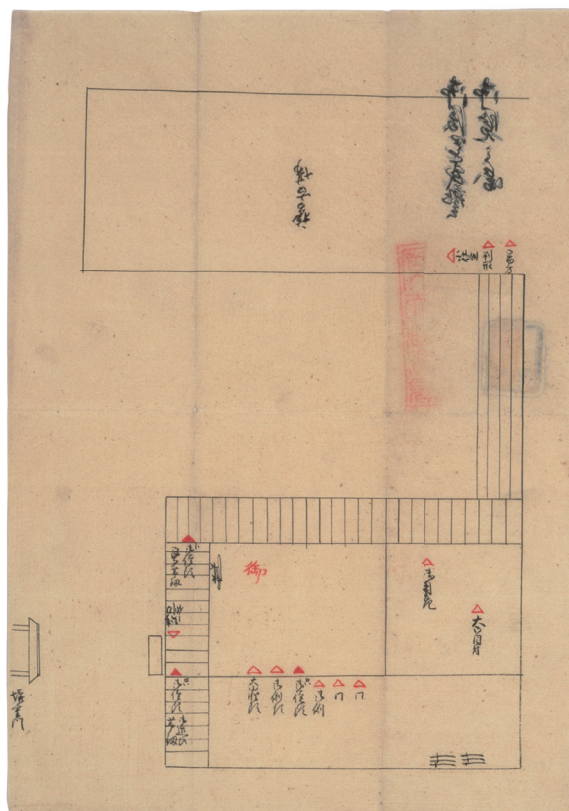
御後園の武芸所・大楽屋あたりを描いた指図。藩主などの御成にそなえて、屏風などを設ける場所が朱線で示されている。



41 御後園武芸御覧之図

1枚 年月日未詳
T13-15 27.0 × 18.9

「御」は岡山藩主を指しており、藩主が後楽園内で家臣の武芸稽古を見る際の配置が描かれている。家臣の座所や向く方角、帯剣の有無まで細かに記されている。



42 御家中武芸御覧一件留

豎1冊 安政4年(1857)3月~同5年(1858)2月
H8-69 25.0 × 16.8

後楽園での藩主の武芸御覧に関わる文書の写しをまとめた帳簿である。安政4年(1857)7月22日の藩主御覧のため、梶田宗左衛門と西山庄之介にそれぞれ小筒と種ヶ島(いずれも鉄砲)の披露のため出勤すべきことを命じている。なお、幕末期には、藩主の武芸御覧は毎月6日と22日に実施されていたようである。



43 御後園武芸御覧一件留

豎1冊 安政5年(1858)12月~万延元年(1860)7月
H8-70 24.5 × 17.0

展示資料42と同種類の帳簿である。安政6年(1859)3月22日の藩主御覧のため、西村孫之進(本段留守居役・判形格)と弟子5名に披露のため出勤すべきことを命じている。西村は新陰正田流槍術を修めていたようであり、3月22日にはこれ以外に新陰流太刀(香取儀左衛門など)、竹内流捕手腰廻(垣見半左衛門など)が披露されている。

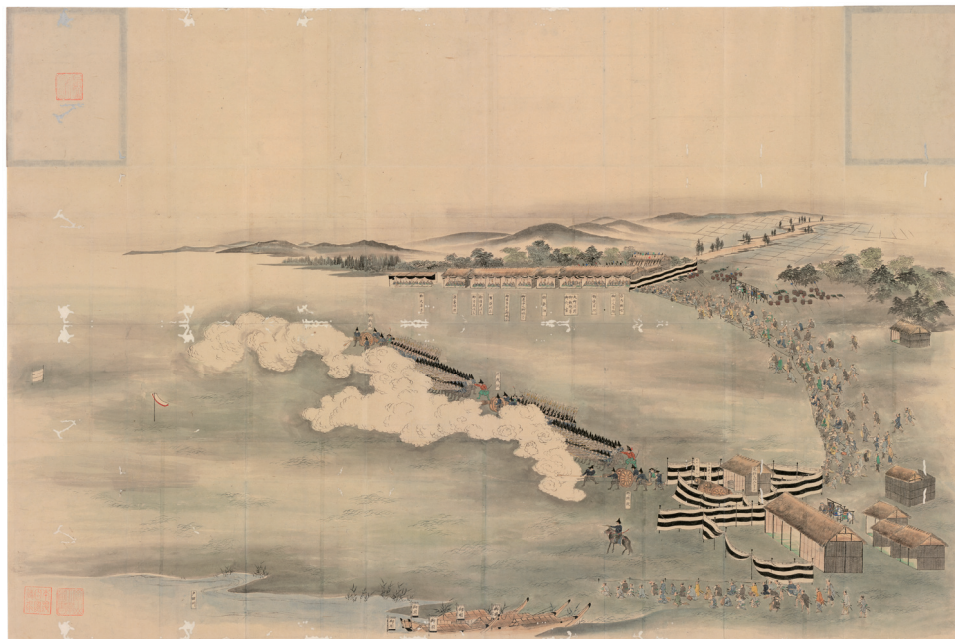


【幕末の武芸と軍事】

44 高島砲術調練之図

1 枚（幕末カ）
T12-117 105.3 × 159.3

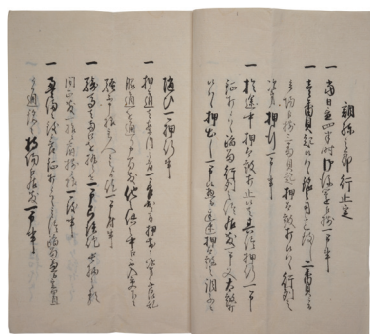
高島流は、長崎の町人高島秋帆が出島のオランダ人から学んで広めた西洋流砲術である。天保11年（1840）9月、秋帆は西洋流砲術の採用による武備強化を幕府に進言し、翌年幕命によって出府して徳丸ヶ原で砲術調練を行った。本図はその時の様子を描いたものとみられる。



45 初度調練定

縦1冊 卯年（安政2〈1855〉）
H7-94-1 28.5 × 19.0

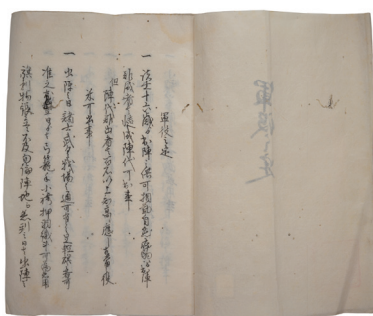
幕末期における軍事調練の際の規定について記した帳簿である。展示箇所では、「調練之節行止定」として、御後園（後樂園）に集合して以降、太鼓や鉦の音に従って移動する際の実定が記されている。展示箇所の前頁までは「初度調練之節定」として、調練に出席する者や装束についての規定が記されている。



46 軍役之定

縦1冊 慶応2年（1866）5月
H5-52 28.0 × 20.2

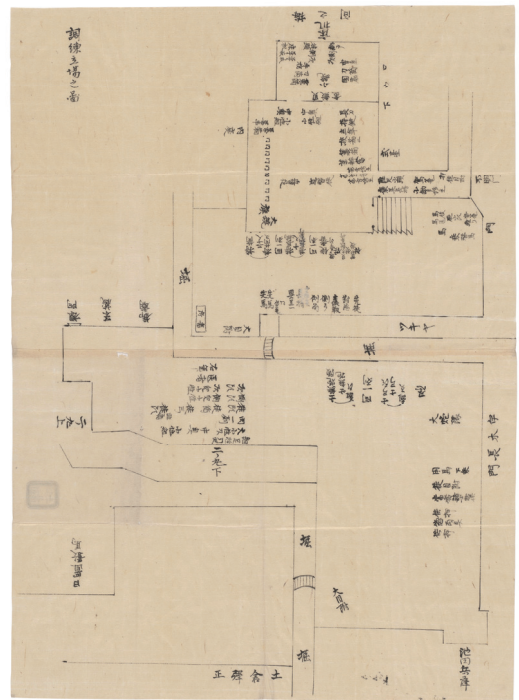
岡山藩士の軍役について定めたものであり、展示箇所では16歳より出陣の供を勤めるべきことや病弱者の陣代、出陣の際の武具や装束についての規定が記されている。17世紀以来の岡山藩の軍役規定（天和4年〈1684〉「軍役之定」など）をふまえつつ、鉄砲や大砲について定めた内容がより目立つ規定となっている。



47 調練立場之図

1 枚 年月日未詳
H7-31 55.3 × 39.9

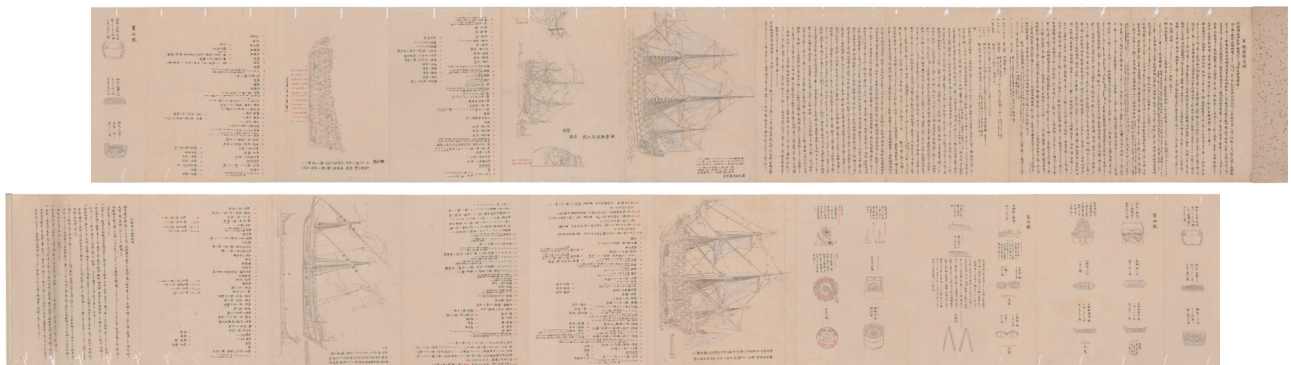
岡山城での調練の際の配置を描いた絵図とみられる。「床机」とある部分に藩主が座し、その周辺に近習や側衆が描かれている。比較的外縁部に大砲隊や家老が配置されており、家老の名前から幕末期に作成された絵図であることがわかる。



48 西洋軍艦図解

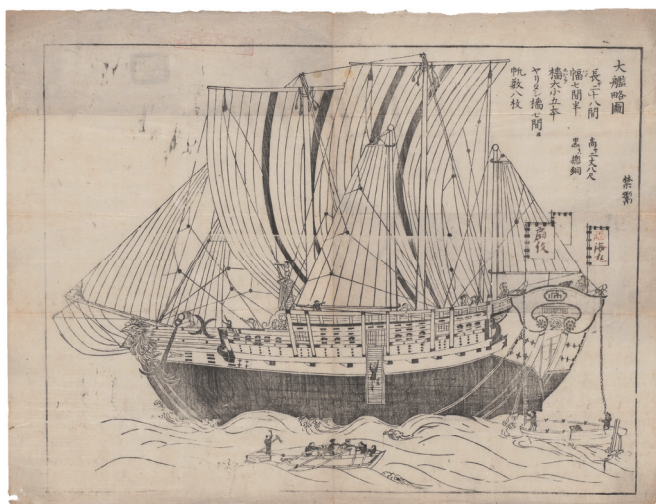
1 巻 (幕末カ)
T13-98 51.7 × 738.0

弘郎察（フランス）の軍艦を描いた図巻であり、冒頭には絵図作成に至る経緯、オランダの舟師や海戦についての記述がみられる。全体の外観図だけでなく、軍艦の部位の名称や内部の各階層についての詳細な情報が記されている。本資料は「正栄」が翻訳したものと記されており、「正栄」は幕府オランダ通詞の本木庄左衛門（明和4年～文政5年〈1767～1822〉諱：正栄）を指すとみられる。



49 大鑑略図（福海丸）

1 枚 年月日未詳
N2-70 34.5 × 45.5

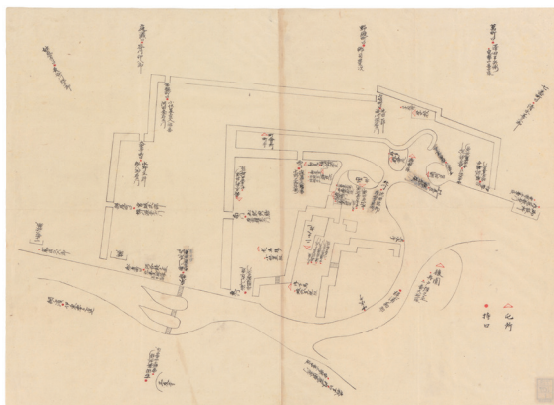


長さ28間（50メートル強）、幅7間半（14メートル弱）の大型帆船の絵図であり、船外部の黒色部分は銅張りとなっている。「福海丸」、「扇紋」と記された幟を掲げており、家紋と船の規模から秋田藩の船ともみられるが、詳細は不明である。

50 御手配図式

1枚 (卯(慶応3(1867)カ)12月)
T13-107-1 40.5 × 56.0

岡山城・城下町各所の屯所や持口など、城下の防衛体制を描いた絵図である。人名や電撃隊・遊撃隊などの隊名、包紙の「卯十二月改」という記述から、慶応3年の作成とみられる。



51 御手配図式

1枚 (卯(慶応3(1867)カ)12月)
T13-107-2 52.2 × 55.8

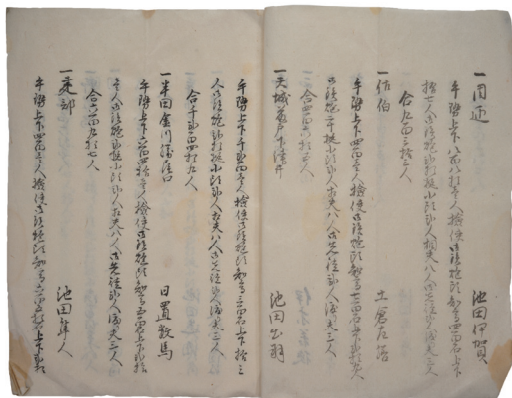
備前国全域での軍事配置を描いた絵図であり、道ごとの押さえや台場の位置などが記されている。展示資料50と対になる絵図であり、両絵図をみることで最幕末期の岡山藩における防衛・軍事配置を知ることができる。



52 追掛口

縦1冊 年未詳 5月8日
H5-63 26.5 × 19.0

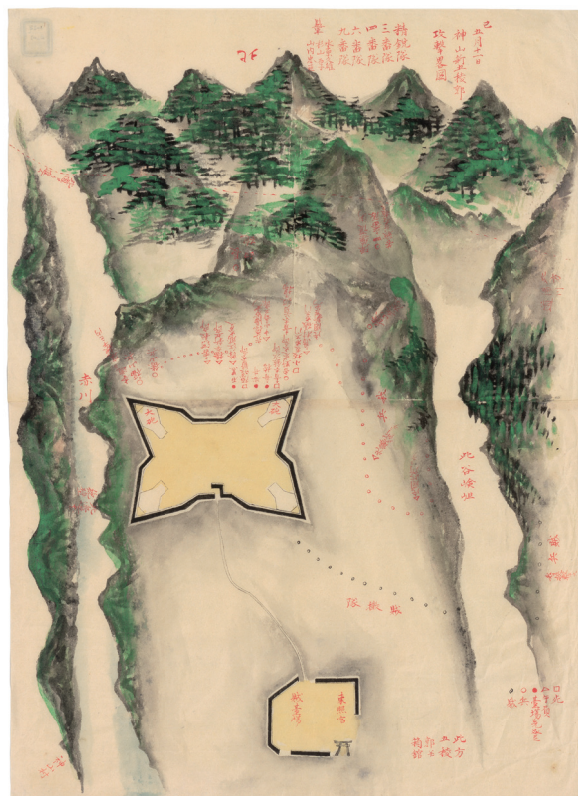
幕末期における岡山藩家老・重臣たちの動員人数や守衛する方面(「口」)が書かれている。展示箇所は、家老の池田伊賀(片桐池田家)、土倉左膳、池田出羽(天城池田家)、日置数馬、池田隼人(建部池田家)についての記述であり、いずれも自家の陣屋周辺の守衛を担当している。



53 蝦夷地戦争略図

1枚 明治2年(1869)
T12-21-1 39.8 × 54.5

明治2年(1869)5月11日の神山新五稜郭(四稜郭)攻撃の様子を描いた図である。死傷や台場先登など隊員の行動が朱書きで示されている。



【林原美術館出展資料】

林 1 床几^{しょうぎ}

一基 江戸時代
陣具 78 24.7 × 35.0 × 39.1

池田利隆所用と伝えられる床几。床几は折り畳み式の腰掛けの一種で、戦陣の用具であるとともに、儀式の際にも用いられた。座面は黒塗の革敷、装飾は銀の縁金具のみと簡素な造りである。林原美術館に伝わる池田家伝来の床几の中には、蒔絵が施された豪華なものも伝わっているが、本作は実用的な造りであることから、利隆が実際に使用していたものと推定される。



林 2 鞭^{むち}

一本 江戸時代
馬具 72-2 85.0



池田利隆所用と伝えられる鞭。全体を黒漆塗とし、金蒔絵で池田家の家紋である泊蝶を散らしている。持ち手の部分は金欄地簾卷。同箱には本作よりやや短い、輝政所用とされる鞭も収められている。

林 3 黒塗張抜尖冠形兜^{くろぬりはりぬきとがりがんむりなりかぶと}

一頭 江戸時代
甲冑 8 28.2 × 101.2 × 31.5



実質的な初代岡山藩主の池田光政所用と伝わる、黒漆塗の変わり兜である。後部の頂点が山形に高く突き出て、後立てが湾曲を描きながら大きく左右にのびている。打ち出しの^{みあげまゆ}見上眉があり、結び文の前立てが^{しころ}付く。鍔は黒塗板札黒糸素懸威の六段下がりである。桃山時代に流行する変わり兜の流れを受け継いでいるが、黒と銀という色使いは質実剛健を旨とする光政の好みをよくあらわしている。

林 4 黒塗唐冠形兜^{くろぬりとうかんなりかぶと}

一頭 江戸時代
甲冑 28 30.3 × 72.1 × 35.8



池田光政所用の黒漆塗の冠形の兜。中国の唐冠を崩した形で、冠の後頭部に付ける垂れである^{えい}纓を大きくしたものを付けて、兎の耳に見立てている。^{みあげまゆ}見上眉を打ち出して、眉間に丸紋を金箔で押して月輪を表し、月と兎を意味する。^{しころ}鍔は板札五段下がりである。唐冠とは中国由来の朝服を着る時に被る冠である。本兜はこの唐冠を模して唐風の威厳のある様をあらわし、さらに形を崩して月兎をあらわすという威厳と軽妙さを併せ持った意表をつく意匠となっている。

林 5 黒漆塗泊蝶紋鞍^{くろうるしぬりとまりちょうもんくら}

一腰 江戸時代
馬具 111 43.4 × 44.1 × 47.1

池田光政所用の鞍。^{まえわ}前輪・^{しずわ}後輪の外側は黒漆地に銀で泊蝶紋をあらわす。鞍の内側は金地とし、さらに銀で総覆輪（全体の縁を金属で覆い保護する工夫）を施している。この鞍には四方手・切付・肌付が仕組まれ、泊蝶紋をあらわした^{あぶみ}鍔も付属している。後輪の内側の跡から、実際に使用していたことが確認できる。





出展資料目録

番号	資料名	員数	年代	整理番号	法量(h×w,cm)
【岡山藩の狩猟】					
1	〔磐梨郡牟佐村高倉山御鹿狩絵図〕	1枚	子年(享保5年(1720)ないし同17年(1732))	T13-30-2	65.7×101.4
2	〔磐梨郡牟佐村高倉山御鹿狩絵図〕	1枚	子年(享保5年(1720)ないし同17年(1732))	T13-30-3	29.7×39.7
3	牟佐御待場之図并高倉山東谷御待場之図	1枚	享保■(7)年(1722)2月18日	H5-18	79.4×41.8
4	藤ヶ鳴御狩場絵図	1枚	明和5年(1768)2月18日	H5-69-2	40.1×59.6
5	於津高郡藤ヶ鳴猪鹿追被遊御覧候一件	豎1冊	明和5年(1768)2月18日	H5-69-1	28.2×20.0
6	於竜ノ口山猪鹿追御覧之図	1枚	天保15年(弘化元、1844)2月	T13-41	79.0×111.0
7	龍口山御狩留 全	豎1冊	天保15年(弘化元、1844)	H5-1	26.8×19.0
8	有斐録	豎1冊	寛延元年～2年(1748～1749)頃	P21-269	27.2×19.6
9	御殺生御獲物帳	横半1冊	文久3年(1863)11月～慶応元年(1865)9月27日	H5-4	13.5×19.8
10	池田主殿鷹場御免之一件	豎1冊	正徳6年(享保元、1716)	H3-3	28.0×20.3
11	小金原江鹿御狩之節御場所絵図	1枚	享保10年(1725)3月27日	T13-38-1	59.2×59.9
12	〔下総国小金原江鹿御狩騎馬立絵図〕	1枚	享保10年(1725)3月27日	T13-38-2	29.3×40.1
【軍学・武具】					
13	〔松田重遠軍学進講書〕	豎1冊	文化8年(1811)6月	H2-336	28.2×20.4
14	〔松田金次郎奉公書〕	豎1冊	寛延2年(1749)12月晦日～明治2年(1869)12月晦日	D3-2429	28.4×20.4
15	許容牒	1巻	天保3年(1832)6月24日	H2-286	18.4×108.6
16	旗本家中武具之定	豎1冊	天和4年(貞享元、1684)正月11日	H1-8	23.2×17.5
17	留守中若一揆等俄ニ起候時守城之定	1巻	天和4年(貞享元、1684)正月11日	H2-111	30.6×177.2
18	切腹介錯法令口決 全	豎1冊	文化7年(1810)4月	D7-38-1	23.3×17.4
19	〔御旗本御陣取図〕	1鋪	享保7年(1722)3月5日	H2-100-3	206.6×175.2
20	御旗本戦前御人数配絵図	1枚	年月日未詳	H3-161	151.4×105.0
21	〔旗指物図〕	1帖	年月日未詳	H4-36	25.6×21.4
22	濃州関ヶ原御合戦図	1枚	享保14年(1729)5月	T12-120	111.8×202.4
23	〔兵学所建物用地図〕	1枚	(明治3年(1870)カ)	T4-1-2	28.3×36.3
24	〔岡山城内鉄砲薬蔵所絵図〕	1枚	(辰年(明治元年(1868)カ))	T3-347-2	54.4×58.5
25	〔門田村蔵所絵図〕	1枚	(辰年(明治元年(1868)カ))	T3-347-3	53.5×59.2
26	胡縁図	1枚	元禄12年(1699)8月	T13-99-5	40.6×54.6
27	兵鼓本図	1枚	年月日未詳	H2-234-2	40.4×83.5
28	阿蘭陀軍馬全備図	1巻	年月日未詳	T13-102	26.2×436.0
【武芸と藩主御覧】					
29	敬白起請文事	1通	慶長2年(1597)6月29日	C9-6-1	34.0×47.0
30	敬白起請文之事	1通	寛永7年(1630)11月25日	C9-6-2	35.0×55.8
31	〔上泉兵二郎奉公書〕	豎1冊	元禄9年(1696)～明治3年(1870)12月29日	D3-762	28.0×20.5
32	〔新陰四田流御鎧術御免状〕	1通	寛政4年(1792)9月	H2-240	44.8×64.2
33	小筒伝書(一二、三四五、六七、八)	豎4冊	安政6年(1859)2月	H2-305-1～4	24.0×18.2
34	学校御絵図	1枚	(江戸時代後期)	T11-21	184.4×134.6
35	備陽国学記録	豎1冊	寛文9年(1669)7月～同12年(1672)	R1-2	26.5×20.8
36	武芸出精之者御賞賜留	豎1冊	慶応2年(1866)12月	H1-4	29.0×19.5
37	〔後樂園絵図〕	1枚	明治8年(1875)2月	T6-1-1	81.4×116.5
38	〔御後園射場絵図〕	1枚	年月日未詳	T7-152-4	53.7×38.2
39	御矢代的之図	1枚	文化3年(1806)9月	T11-120	27.7×40.3
40	〔御後園武芸所・大楽屋図〕	1枚	年月日未詳	T7-152-2	29.2×37.1
41	御後園武芸御覧之図	1枚	年月日未詳	T13-15	27.0×18.9
42	御家中武芸御覧一件留	豎1冊	安政4年(1857)3月～安政5年(1858)2月	H8-69	25.0×16.8
43	御後園武芸御覧一件留	豎1冊	安政5年(1858)12月～万延元年(1860)7月	H8-70	24.5×17.0
【幕末の武芸と軍事】					
44	高島砲術調練之図	1枚	(幕末カ)	T12-117	105.3×159.3
45	初度調練定	豎1冊	卯年(安政2(1855))	H7-94-1	28.5×19.0
46	軍役之定	豎1冊	慶応2年(1866)5月	H5-52	28.0×20.2
47	調練立場之図	1枚	年月日未詳	H7-31	55.3×39.9
48	西洋軍艦図解	1巻	(幕末カ)	T13-98	51.7×738.0
49	大鑑略図(福海丸)	1枚	年月日未詳	N2-70	34.5×45.5
50	御手配図式	1枚	(卯(慶応3(1867)カ)12月)	T13-107-1	40.5×56.0
51	御手配図式	1枚	(卯(慶応3(1867)カ)12月)	T13-107-2	52.2×55.8
52	追掛口	豎1冊	(年未詳)5月8日	H5-63	26.5×19.0
53	蝦夷地戦争略図	1枚	明治2年(1869)	T12-21-1	39.8×54.5
【林原美術館】					
林1	床几	一基	江戸時代	陣具78	24.7×35.0×39.1
林2	鞭	一本	江戸時代	馬具72-2	85.0
林3	黒塗張抜尖冠形兜	一頭	江戸時代	甲冑8	28.2×101.2×31.5
林4	黒塗唐冠形兜	一頭	江戸時代	甲冑28	30.3×72.1×35.8
林5	黒漆塗泊蝶紋鞍	一腰	江戸時代	馬具111	43.4×44.1×47.1

池田家文庫絵図展

年度	展示テーマ	会 期	会 場
平成9	絵図にみる岡山城	1997年10月24日～11月2日	岡山大学附属図書館
平成10	岡山藩と海の道	1998年10月23日～11月1日	岡山大学附属図書館
平成11	後樂園と岡山藩	1999年10月23日～11月1日	岡山大学附属図書館
平成12	備前慶長国絵図のふしぎ	2000年10月23日～11月1日	岡山大学附属図書館
平成13	岡山藩江戸藩邸ものがたり	2001年10月23日～11月1日	岡山大学附属図書館
平成14	開けゆく岡山平野 岡山藩の新田開発 (1)	2002年10月23日～11月1日	岡山大学附属図書館
平成15	新田開発をめぐる争い 岡山藩の新田開発 (2)	2003年10月23日～11月1日	岡山大学附属図書館
平成16	岡山城下町をあるく	2004年10月23日～11月1日	岡山大学附属図書館
平成17	江戸時代の岡山 池田家文庫絵図名品展	2005年9月29日～10月10日	岡山市デジタルミュージアム
平成18	戦さと城	2006年10月26日～11月12日	岡山市デジタルミュージアム
平成19	陸の道	2007年11月16日～12月2日	岡山市デジタルミュージアム
平成20	日本と「異国」	2008年11月1日～11月16日	岡山市デジタルミュージアム
平成21	岡山藩の教育	2009年9月29日～10月18日	岡山市デジタルミュージアム
平成22	絵図にみる中国四国地方の城下町	2010年11月16日～11月28日	岡山市デジタルミュージアム
平成23	江戸時代の巨大手描き絵図	2011年10月22日～11月6日	岡山市デジタルミュージアム
平成24	日本六十余州図の世界	2012年11月10日～11月25日	岡山シティミュージアム
平成25	開国と岡山藩	2013年11月4日～11月17日	岡山シティミュージアム
平成26	岡山藩と明治維新	2014年11月1日～11月16日	岡山シティミュージアム
平成27	京都と岡山藩	2015年10月24日～11月8日	岡山シティミュージアム
平成28	江戸と岡山藩	2016年10月29日～11月13日	岡山シティミュージアム
平成29	池田光政と絵図	2017年11月3日～11月19日	岡山シティミュージアム
平成30	岡山藩と寺社	2018年11月3日～11月18日	岡山シティミュージアム
令和元	武家と天皇	2019年10月19日～11月4日	岡山シティミュージアム
令和2	岡山・大坂と海の道	2020年10月31日～11月15日	岡山シティミュージアム
令和3	岡山藩と武芸	2021年10月30日～11月14日	岡山シティミュージアム

記念講演会

年度	記念講演会	記念講演会講師（役職は当時）	期 日
平成9	絵図を読む	岡山大学文学部教授 倉地克直	1997年10月25日
平成10	瀬戸内の交流	岡山県総合文化センター総括学芸員 竹林榮一	1998年10月23日
平成11	日本庭園と後樂園	岡山大学農学部教授 千葉喬三	1999年10月23日
平成12	江戸幕府の国絵図事業	東亜大学教授 川村博忠	2000年10月28日
平成13	岡山藩の江戸藩邸	東京大学史料編纂所教授 宮崎勝美	2001年10月23日
平成14	津田永忠と岡山藩の土木事業	岡山大学環境理工学部教授 名合宏之	2002年10月26日
平成15	近世の境界論争と裁判	東京大学史料編纂所助教授 杉本史子	2003年10月23日
平成16	岡山城下町を掘る ～絵図と遺構～	岡山市デジタルミュージアム開設事務所 乗岡実	2004年10月23日
平成17	池田家文庫絵図の見方	岡山大学文学部教授 倉地克直	2005年10月1日
平成18	「長久手合戦図屏風」の世界	茨城大学人文学部教授 高橋修	2006年10月26日
平成19	江戸時代の陸上交通	岡山県立記録資料館館長 在間宣久	2007年11月23日
平成20	「鎖国」の中の日本と朝鮮	名古屋大学文学部教授 池内敏	2008年11月1日
平成21	儒教教育と武士の人間形成	京都大学大学院教育学研究科教授 辻本雅史	2009年10月3日
平成22	デジタルマップで廻る城下町	徳島大学大学院ソシオ・アーツ・サイエンス研究部 教授 平井松午	2010年11月20日
平成23	国絵図復元の成果	東京藝術大学大学院准教授 荒井経	2011年10月23日
平成24	徳川家光と日本	京都大学名誉教授 藤井譲治	2012年11月18日
平成25	開国と開港	東京大学史料編纂所教授 横山伊徳	2013年11月9日
平成26	幕末維新期の岡山	東京大学名誉教授 宮地正人	2014年11月8日
平成27	近世京都の大名屋敷	京都大学大学院文学研究科教授 横田冬彦	2015年10月31日
平成28	大名家の江戸勤役	学習院女子大学大学院教授 岩淵令治	2016年10月30日
平成29	池田光政の時代	岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授 三宅正浩	2017年11月12日
平成30	池田家と国清寺	元岡山県立記録資料館館長 在間宣久	2018年11月10日
令和元	『大嘗祭』の誕生 古代の皇位継承儀礼の生成と変異	専修大学名誉教授 荒木敏夫	2019年10月26日
令和2	西国の武士、大坂に出張する 一蔵屋敷と大坂城加番	兵庫県立歴史博物館長 藪田貫	2020年11月7日
令和3	戦国合戦図屏風の世界 池田家にかかわる作品を中心に	茨城大学人文社会科学部人間文化学科教授 高橋修	2021年11月6日

パネルディスカッション

年度	パネルディスカッション	期 日
平成23	国絵図復活 東京大学史料編纂所教授 杉本史子 東京藝術大学大学院准教授 荒井経 電気通信大学准教授 佐藤賢一 筑波大学大学院博士前期課程 中村裕美子 国絵図研究会会員 青木充子 〔司会〕東京大学大学院准教授 中村雄祐	2011年10月23日

令和3年度企画展 池田家文庫絵図展 岡山藩と武芸

発行日／令和3年10月30日

主 催／岡山大学附属図書館・岡山シティミュージアム

共 催／林原美術館

発 行／岡山大学附属図書館

〒700-8530 岡山市北区津島中三丁目1-1

印 刷／株式会社アネスト

岡山大学学都基金

—地域・社会とともに、真のグローバル人材を育成する—



「岡山大学学都基金」では、本学における学生支援、教育・研究活動、国際交流及び社会貢献活動の一層の充実を図るとともに、新たな価値を創造し続けるSDGs推進研究大学の進展等に資することを目的として、平成27年4月から募金活動を行っております。

現在、大学の運営基盤を支える運営費交付金は毎年減少傾向にあり、本学を取り巻く環境は大変厳しくなっております。卒業生をはじめ、広く地域・社会その他諸方面の皆様には、「岡山大学学都基金」についてご理解いただき、格別のご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。





岡山大学
OKAYAMA UNIVERSITY

リサイクル募金



読み終えた本などの
リサイクル品で
支援ができます

リサイクル募金によるご寄付も受付中

お問い合わせ

岡山大学学都基金事務局（総務・企画部総務課）

〒700-8530 岡山市北区津島中一丁目1番1号
TEL: 086-251-7009 E-mail: kikin@adm.okayama-u.ac.jp
電話受付: 9:00-17:00(土・日・祝日除く)

寄付金の申込方法

左の連絡先に、ご住所とお名前をお知らせください。折り返しお送りするパンフレットに同封の振込依頼書により振込手続きをお願いいたします。インターネットからの申込も可能です。本学へのご寄付は、所得税法、法人税法による税制上の優遇措置が受けられます。詳しくは、ホームページをご覧ください。



岡山大学学都基金

検索

学都基金ホームページ

<https://www.okayama-u.ac.jp/user/kouhou/kikin/>



池田家文庫資料叢書



岡山大学附属図書館貴重資料刊行推進会 編（編集代表：倉地克直）

岡山大学附属図書館に所蔵されている池田家文庫の貴重資料のうち、特に学術的価値の高いものを厳選して刊行しています。

A5 版 / クロス装・ケース付

池田家文庫資料叢書 3

「御留帳評定書」上・下巻 各 19,800円（税込）

【上巻】本文 605 頁、解説 19 頁 【下巻】本文 558 頁

岡山藩の政策決定機関である評定所での審議の様子を記録した、当時の社会状況とそれに対する藩の対応を具体的に知ることができる貴重な資料です。

池田家文庫資料叢書 2

「朝鮮通信使饗応関係資料」上・下巻

【上巻】本文 598 頁、解説 22 頁 11,000円（税込）

【下巻】本文 749 頁、解説 25 頁 12,222円（税込）

池田家文庫資料叢書 1

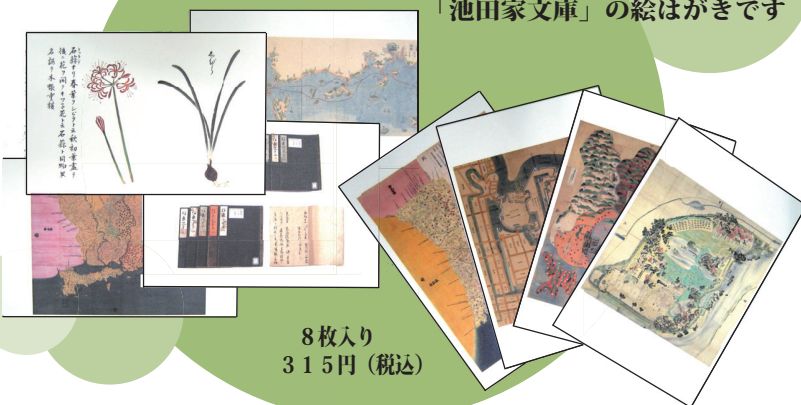
「御留帳御船手」上・下巻 各 7,700円（税込）

【上巻】本文 627 頁、解説 9 頁 【下巻】本文 717 頁



池田家文庫 絵はがき 第一集

岡山大学附属図書館所蔵の貴重資料
「池田家文庫」の絵はがきです



8枚入り
315円（税込）

※絵はがきは出版会に直接お申し込みください
書店での販売はございません



8枚入り
315円
（税込）

岡山大学資源生物科学研究所
所蔵貴重資料 絵はがき

岡山大学出版会

◇ご購入方法：岡山大学出版会、またはお近くの書店にお問い合わせ下さい。
メールでのご注文はこちらへ → okayama-up@adm.okayama-u.ac.jp

〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中 3-1-1
Tel : 086-251-7306 Fax : 086-251-7314

岡山大学出版会 |

検索

<https://www.lib.okayama-u.ac.jp/up/>